

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 27 日現在

機関番号：32675

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2015

課題番号：26770229

研究課題名(和文) 日本中世前期における版本文化の基礎的研究

研究課題名(英文) Basic study of the printed book culture in the earlier period of Japanese Middle Ages

研究代表者

大塚 紀弘 (OTSUKA, Norihiro)

法政大学・文学部・講師

研究者番号：10468887

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：泉涌寺(京都市東山区)は、唐代および宋代の中国で撰述された戒律関係仏典を集成した律宗三大部の版本73帖を所蔵しているが、これまで十分に研究されてこなかった。そこで本研究では、これらの版本の全点を詳細に調査するとともに、デジタルカメラによる写真撮影を行なった。その成果に基づいて考察した結果、それぞれの版本の多様な来歴を明らかにすることができた。こうした調査・研究の成果については、研究成果報告書にまとめて刊行した。

研究成果の概要(英文)：Sennyuji temple (Higashiyama-ku, Kyoto-shi) possesses 73 printed books of the Ritsu sect three large part that were written in China of Tang charges and Soong charges, but has not been studied enough until now. Therefore, in this study, I investigated the all the articles of these printed books in detail and took a picture by a digital camera. As a result of having considered it based on the result, a variety of origin of each printed book became clear. About the result of such a research, I published it in results of research report.

研究分野：日本史学

キーワード：版本 出版 泉涌寺 西大寺 律宗 律家 戒律 宋版

1. 研究開始当初の背景

(1) 中世前期の日中交流、すなわち日宋・日元交流については、中世仏教の成立史という観点から研究を始めた。特に、鎌倉時代の入宋・入元僧が、新たな僧侶集団の形成に果たした役割に注目し、博士論文で独自の「中世仏教論」を提示した。それを基に平成 21 年に刊行したのが、著書『中世禅律仏教論』である。こうした視角で研究を進める過程で、中国商人や入宋・入元僧によって、具体的にどのような物や知識が日本にもたらされ、それらがどのように社会的に受容・活用されたかという点に関心が広がった。また、僧侶が日本の寺院に移入した中国の物や知識が、人の活動を背景として、社会に浸透していく過程を明らかにすることで、日本の文化史・社会史に豊かな肉づけを加えるのみならず、全く新しい歴史像を提示できると考えた。

(2) 日本中世の対外関係は、近年、日本史学の分野で最も研究が盛んな分野の一つである。特に、平成 17 年度～21 年度文部科学省特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成 寧波を焦点とする学際的創生」によって、学際的な研究が進展し、その意義、面白さが広く認められるに至った。日宋・日元間の貿易については、山内晋次『奈良平安期の日本とアジア』、榎本渉氏『東アジア海域と日中交流』を始めとして、ここ数年で研究が盛んになり、さらなる議論の深化が期待されている。私も論文「唐船貿易の変質と鎌倉幕府」で、鎌倉時代における貿易形態の全体像の構想を提示した。こうした経済的関係による物の往来を前提にして、日中交流が活発化したのである。そこで課題となるのが、人の知識の往来の具体的な状況を明らかにすることである。人の往来については、木宮泰彦氏が『日華文化交流史』で僧侶の往来を集成したが、榎本渉氏らによって、さらに研究が深められつつある。私は、入宋僧の歴史的意義を中心に、論文「東アジアのなかの鎌倉新仏教運動」「The Introduction of Southern Sung Buddhism to Japan by Japanese Monks Who Visited China and Its Repercussion (入宋僧による南宋仏教の日本移入とその衝撃)」などにまとめ、論文「日宋・日元仏教の交流と相互認識」では相互認識について論じた。知識の往来については、特に美術史学において仏像・仏画における宋風受容が注目されてきたが、その他の事例についても研究の余地が多く残されている。私は、主に中国に由来する図像、建築、版本を題材に、数年来、基礎的な研究を進めている。例えば図像に関しては、論文「宝篋印塔源流考」で、日本で宝篋印塔と呼ばれる中国由来の塔婆を取り上げ、その知識の日本への複線的な伝播の過程を明らかにした。また、建築に関しては、論文「中世の寺社と輪蔵」で中国由来の建築物である輪蔵

に注目し、その受容と社会的な展開を明らかにした。

(3) 本研究の研究対象である版本については、平成 12 年度～16 年度特定領域研究「東アジア出版文化の研究」で、日本に伝わった版本を素材にして、中国の出版文化を中心とする研究が進展した。また、高山寺(京都市)、西大寺(奈良市)、東大寺(同前)など、各地の寺院で所蔵資料の調査が着実に進められ、中国から請来された一切経や仏典の版本の書誌的な情報が明らかになるとともに、牧野和夫氏らによって個別研究もなされている。私の研究としては、すでに宋版一切経や南宋版の輸入についての概要を把握している。例えば、論文「宋版一切経の輸入と受容」では、史料上で確認できる鎌倉時代までの宋版一切経の輸入・受容の状況をまとめた。鎌倉時代に高山寺に請来された南宋版については、『高山寺聖教目録』を手がかりに、論文「高山寺の明恵集団と宋人」で旧蔵分を含めて集成して検討を加えた。さらに、論文「寧波阿育王寺のウナギ」では、入宋僧によって南宋版の『護塔靈鰻菩薩伝』が輸入され、寧波阿育王寺の舍利塔や靈鰻に関する知識に日本に伝播した過程を明らかにした。なお、中世の仏典版本のうち、戒律関係のものに関しては、平成 23 年の戒律文化研究会大会で、「中世南都の律法興行と出版」と題して報告した。また、鎌倉関係の版本については、平成 25 年度の中世都市研究会大会で「中世鎌倉における中国文化の受容 版本・輪蔵・碑文を題材に」と題して発表した。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、日宋・日元交流によって中国文化が日本の社会・文化に及ぼした影響とその歴史的意義について明らかにすることにある。対象とする時期は中世前期、すなわち平安時代後期から南北朝時代である。その際、人の往来に伴って、物や知識がどのような過程で伝播し、いかなる変容を経て、日本社会に受容されていったか、という社会史的な観点を重視する。具体的には、中国に由来する文化的要素として、版本・出版文化を題材とし、東アジアの中における日本社会・文化の特質を浮かび上げたい。そして、その成果を、対外交流史および文化史を含めた新たな中世社会史の叙述に結びつけることを目指す。

(2) 上記の目的を達成するため、本研究では日本中世の版本文化史を再構築すること、すなわち中世の輸入版本および出版事業の実態と歴史的意義を明らかにする。その上で、日本中世の出版活動を、中国を中心に朝鮮半島やベトナムも視野に入れた東アジア版本文化史の中に位置づけたい。そのために、中世に輸入・刊行された版本の中、大半を占める仏典類を対象に、基礎的な調査・研究を進

め、一定の全体像を提示することを目標とする。中国宋代に飛躍的に発達した版本文化は、日宋・日元交流によって、異文化として日本に受容されたと考えられる。そして、南都・京都・鎌倉などの寺院では、輸入版本の影響を受けて、出版活動が活発し、さらには輸入版本を版下に利用した複製版も刊行されるに至った。しかしながら、このような寺院を中心とする中世の版本文化に関しては、江戸時代のそれと比べて研究が不足しており、その意義が十分に明らかにされているとは言い難い。網羅的な研究として、木宮泰彦氏の『日本古印刷文化史』や川瀬一馬氏の『五山版の研究』があるが、近年、寺院所蔵の聖教調査が進み、新出の版本も多く見出されている。これら新出版本の調査・研究によって、日本中世の版本文化史は、大幅な書き換えを迫られているのである。こうした問題関心により、本研究では、これまで紹介された中世版本の情報を集成・整理するとともに、鎌倉時代の版本を中心に現物の調査・研究を行なう。さらには、版本調査の成果をふまえて、現存しない事例も考慮に入れることで、中世の出版文化史をより豊かなものとしたい。

3. 研究の方法

(1) 異文化受容の窓口になった中世前期の寺院は、仏典などの版本を大量に輸入・蓄積するのみならず、活発な出版事業を展開した。その結果として、寺院などに今も伝えられている版本が調査の対象となる。デジタル画像による詳細な比較検討のため、書誌的調査のみならず、可能な限りデジタルカメラによる撮影を行なう。対象とするのは、宋元版、覆宋版を中心とする和版、それに宋版の系統を引くと推測される転写本である。その中心となるのが、律三大部と呼ばれる唐代および宋代に撰述された戒律関係の仏典である。それらは、京都市の泉涌寺、高山寺、東寺、奈良市の東大寺図書館、唐招提寺、宮内庁書陵部、横浜市の称名寺、岐阜県郡上市の長滝寺などが所蔵している。同じ律三大部でも、系統が異なるものがあるため、書誌的な分析が不可欠である。以上の中、泉涌寺に所蔵されている版本については、すでに予備的な調査と一部の撮影を終えている。ただし、様々な出自を持つ版本が取り合わされているため、さらなる詳細な調査・分析が仏要である。川瀬一馬「泉涌寺版について」(『書誌学』新 15、1969年)、平春生「泉涌寺版と俊苒律師」(石田充之編『鎌倉仏教成立の研究 俊苒律師』法蔵館、1972年)で見解が異なるものもある。したがって、宋版と泉涌寺版、泉涌寺版の初刻、再刻の判別には、他に所蔵される同名版本との比較が不可欠である。そこで、泉涌寺所蔵本に的をしぼって、再調査を行なう。

(2) 上記の泉涌寺版の研究成果をふまえ、南都(大和国)の出版事業について研究を進

める。鎌倉時代の南都では、西大寺、唐招提寺、東大寺戒壇院などの律院で、使用頻度の高い戒律関係の仏典を中心として活発に開版が行なわれた。本研究では、そのうち最も出版活動が盛んであった西大寺を対象とし、同寺を律院として復興した叡尊が住持を務めていた鎌倉時代中期から後期にかけての出版事業を明らかにする。南都では、平安時代後期から興福寺で春日版と呼ばれる版本が刊行されており、律院の出版活動とも関係が深かったことが想定される。版式の上では、写本系の春日版と宋版系の西大寺版と一応の区分ができるが、開版・印刷に関しては一定の協力関係にあったとみられ、この点もふまえて研究を進める。

(3) 平安時代から南北朝時代までに、日宋・日元交通によって中国から日本にもたらされた現存版本の一覧を作成する。現存版本一覧には、刊記、奥書、蔵印を載せ、原所在地や輸入の経緯についても分析する。次に、中世前期に作成された寺院の聖教目録などの史料から「唐本」の注記などを手掛かりにして中国で刊行された版本を見出し、該当する書名を推測し、日本請来版本の一覧を作る。この一覧表には、推測される版本の請来時期および所蔵先を載せる。特に仏教書に関しては、中国での出版地および年代を把握することで、中国版本のうち、いつ頃、どこで刊行された、どの分野のものが、どの程度の分量、日本にもたらされたかが明らかになるはずである。

4. 研究成果

(1) 律三大部と呼ばれる唐代および宋代の中国で撰述された戒律関係仏典の版本を主な対象として、原本調査に取り組んだ。平成26年度は、泉涌寺(京都市東山区)の所蔵する律三大部版本の中、『四分律比丘含注戒本』『四分律刪補隨機羯磨』『四分律含注戒本疏』『四分律刪補隨機羯磨疏』『四分律行事鈔』の書誌を調査するとともに、デジタルカメラによる写真撮影を行なった。続いて平成27年度は、同じく泉涌寺の所蔵する律三大部版本の中、『四分律含注戒本疏行宗記』『四分律含注戒本疏科文』『四分律羯磨疏濟縁記』『四分律羯磨疏科文』『四分律行事鈔資持記』『四分律行事鈔科文』の書誌を調査するとともに、デジタルカメラによる写真撮影を行なった。以上の調査に基づいて考察した結果、泉涌寺所蔵の律三大部版本について、次のようなことが明らかになった。宋版は四天王寺薬師院旧蔵の一帖のみで、残りの72帖は和版である。後者の中、2帖は鎌倉時代前期に泉涌寺で開版された版本、3帖は鎌倉時代後期から南北朝時代に印刷された版本である。その他の版本の多くも南北朝時代までに印刷されたと考えられる。明応5年(1496)恵隆が現存版本の中、泉涌寺末寺の加賀国徳山泉徳寺にあった11帖を泉涌寺に寄進した。

元和元年(1615)頃、現状の泉涌寺律三大部が揃えられ、修補がなされた。その際、巻首と巻尾に「泉涌寺」の墨書、喉に書名を示す墨書が書き加えられた。また、現存する専用の箱棚が制作され、計73帖の版本が収納された。西大寺旧蔵の17帖、海龍王寺旧蔵の9帖など、かつて大和国西大寺やその末寺にあった版本が37帖ほど含まれる。永享5年(1433)四天王寺舎那院の高勢が現存版本の1帖を撰津国多田院に寄進した。この版本は後に西大寺大慈院に移された。天文4年(1535)薬師寺十輪院の長基が、現存版本の中、大和国極楽寺旧蔵の8帖を西大寺に寄進した。西大寺大慈院の高珎は、現存版本の中、少なくとも4帖を所持しており、慶長16年(1611)に別の一帖を修補した。計6帖は、西大寺大慈院旧蔵である。上記の内容については、平成27年度に、研究成果報告書として『御寺泉涌寺の中世版本 泉涌寺蔵律三大部版本調査研究報告書稿』にまとめて刊行し、関係する機関・個人に配布した。

(2) 鎌倉時代に西大寺流を始めとする律家が展開した出版事業を対象として研究に取り組んだ。その結果、次のようなことが明らかになった。鎌倉時代の西大寺流では、興福寺版の戒律関係書を積極的に活用していた。興福寺版の隆盛を前提にして、南都の律法興行は円滑に進行したともいえる。刻工(雕手)、印刷者は、興福寺版と西大寺版などの南都の版本で共通していたことも想定される。また、西大寺の出版事業は、勸進活動によって進められたが、興福寺からも多大な経済的支援を受けた。泉涌寺のみならず、南都系の律家でも輸入宋版を盛んに利用して出版事業を進めた。泉涌寺の他、南都でも律三大部を始めとして、宋版に由来する版本が刊行された可能性が高い。従来、泉涌寺版とされてきた無刊記の覆宋版については、再考の必要がある。南都・北京の律家では、毎月の布薩で、ともに版本の戒本を使用した。泉涌寺版の『梵網経』『新刪定四分僧戒本』『四分刪定比丘尼戒本』、西大寺版の『新刪定四分僧戒本』は宋版に由来する可能性が高い。また、孟蘭盆の作法では、両流ともに宋版由来の『蘭盆献供儀』に依拠していたとみられる。版本に限らず、中世の律家で使用された戒律関係書は、道宣・元照撰述書を中心に、全般的に輸入宋版を淵源とすると考えられる。上記の内容については、論文「中世律家の出版事業と律法興行 西大寺流を中心に」にまとめて学術雑誌に投稿し、平成27年度に刊行された。

(3) 平安時代から南北朝時代までに、日宋・日元交通によって中国から日本にもたらされた現存版本の一覧を作成した。現存版本一覧には、刊記、奥書、蔵印を載せ、原所在地や輸入の経緯についても分析した。次に、

寺院の聖教目録などの史料から「唐本」の注記などを手掛かりにして中国で刊行された版本を見出すとともに、該当する書名を推測し、日本請求版一覧を作成した。以上の作業の結果、中世前期における中国版本輸入の実態について、一定の全体像をつかむことができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計6件)

大塚 紀弘、中世律家の出版事業と律法興行 西大寺流を中心に、仏教史研究、査読有、54号、2016、pp.30-54

大塚 紀弘、未代上人の富士山埋経と如法経信仰、日本宗教文化史研究、査読有、19巻2号、2015、pp.20-38

大塚 紀弘、服装から見た中世の律僧 伝木食応基像を読み解く、ぶい&ぶい、査読無、28号、2015、pp.13-28

大塚 紀弘、日本中世における中国石碑文化の受容、文化史学、査読有、70号、2014、pp.1-27

大塚 紀弘、日宋貿易をめぐる近年の論点と私見、法政史学、査読無、82号、2014、pp.105-109

大塚 紀弘、禅僧が神に袈裟を授ける話 説話の系譜をめぐって、アジア遊学、査読無、174号、2014、pp.54-66

[学会発表](計5件)

大塚 紀弘、服装から見た日本中世の律僧、シンポジウム中世寺院における宋代仏教受容の統合的研究 泉涌寺流を中心とした宋代仏教の相対化への試み、2016.3.17、東京大学東洋文化研究所(東京都文京区)

大塚 紀弘、一遍聖絵に描かれた律僧、神奈川県立金沢文庫連続講座、2015.12.12、神奈川県立金沢文庫(神奈川県横浜市)

大塚 紀弘、Analysis of Japanese Buddhist paintings in Europe based on textual data、EAJS2014、2014.8.29、リュブリャナ(スロヴェニア)

大塚 紀弘、日本中世における文字礼拝の思想、日本宗教史懇話会サマーセミナー、2014.8.21、白浜荘(滋賀県高島市)

大塚 紀弘、日宋貿易をめぐる近年の論
点と私見、法政大学史学会大会講演、
2014.6.7、法政大学（東京都千代田区）

〔図書〕（計3件）

大塚 紀弘、科学研究費若手研究（B）
研究成果報告書、御寺泉涌寺の中世版本
泉涌寺蔵律三大部版本調査研究報告
書稿、2016、45

大塚 紀弘 他（神奈川県立金沢文庫
編）神奈川県立金沢文庫、国宝一遍聖
絵 別冊 金沢文庫篇（一遍聖絵に描か
れた律僧）、2015、79（pp.65-66）

大塚 紀弘 他（中世都市研究会編）
山川出版社、鎌倉研究の未来（中世鎌倉
における中国文化の受容 版本・輪蔵・
碑文を題材に）、2014、236
（pp.121-141）

〔その他〕

ホームページ等 なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大塚 紀弘（OTSUKA, Norihiro）
法政大学・文学部・専任講師
研究者番号：10468887